

お詫びと訂正

2025 年版 大学赤本シリーズ『486／関西大学 国語 3 日程×3 カ年』におきまして、内容の一部に誤りがございました。訂正箇所をお知らせいたしますとともに、謹んでお詫び申し上げます。

教学社編集部

記

2024 年度 2 月 7 日実施分 p.103、p.106

大問 1 問 6 解答・解説

☐ 誤 解答：c

☒ 正 解答：e

解説：第十六段落に「集団の知恵の恩恵を利用する賢い模倣、すなわち適応的な社会的学習戦略が、時に集合愚を生む。集団のメンバーの意見分布がもともと正しい方向へ偏っていれば、賢く模倣し合うことによって、正しさが増幅される。一方、意見分布がもともと間違った方向へ偏っていた場合には、互いに模倣し合うことで間違いが補強されてしまう」とある。これらに合致する e が正解。a、「あまり重要ではない行動……まで一緒に模倣してしまう」とは第十四段落にあるが、「適応的な社会的学習戦略は、いつもうまく働くわけではない」ことの例であり、「集合愚」の説明ではない。b、第十五段落に「名声バイアスが……のに対し、多数派同調は……」とあり、「集合愚」につながる場合があるのは「多数派同調」の方である。c、「両者はコインの裏表のような関係であると述べている」が本文と合致しない。第十六段落に「『集団の知恵』と『集合愚』は、コインの裏表のような関係だと考えられてきた」「このコインの裏表関係は必然的で、いかにも頑健に感じられる」とあるが、これは「と考えられてきた」「いかにも頑健に感じられる」とあるように、筆者の意見として述べているのではなく、従来の考え方の紹介である。筆者は、続く第十七段落で「しかし、実際の集団意思決定は、もっと『時間的に深い』現象だ」と、従来の考え方のように単純なコインの裏表関係ではないと述べている。d、第十五段落にある「文化的慣性」の説明になっているが、「集団の知恵」と「集合愚」の関係の説明にはなっていない。「多数派が特に間違いやすい」場合の説明である。

以上